「つくられた中村弥六像」
中村弥六 マイナスイメージの形成　―犬養毅との関係を中心に―

仮説：中村弥六のマイナスイメージは
犬養毅との関係性によって作られてきた

シンポジウム「甦る中村弥六　布引丸事件」
2022年10月30日
於：伊那市高遠町総合福祉センター「やますそ」

中村弥六研究会会員　木村実季

中村弥六はどのように語られてきたのか

- 中村弥六 → 布引丸事件をめぐるマイナスイメージ
  ↳フィリピン革命・中国革命支援のための資金を着服 → 背信疑惑
- 『萬朝報』・『二六新報』の報道によって事件化
- 中村弥六は所属政党からの除名―1900（明治33）年12月

中村弥六はどのように語られてきたのか

宮崎滔天『三十三年之夢』（1902年）

中村弥六の背信について

「余は實に背山（＝弥六）の肉を喰ひ、
血を啜るも猶ほ且つ慊らざんとす」

『三十三年之夢』が戦後に日中関係史を顧みる時の一級資料に

マイナスイメージを伴う中村弥六の歴史的評価が確定

宮崎滔天（1871 - 1922）
『宮崎滔天全集』第１巻（平凡社）より

中村弥六はどのように語られてきたのか

- 中村弥六に対するマイナスイメージの形成過程を辿るという視点で
- 明治期から戦前に弥六にネガティブな評価を下している資料を探索
- 中村弥六と犬養毅の関係性が
- 中村弥六のマイナスイメージの形成に影響（＝仮説）

中村弥六と犬養毅

森下正夫『中村弥六物語』（高遠ふるさと叢書）より

進歩党・憲政本党で党友
（1896―1900年）

↓

協調関係

対立関係

↑

布引丸事件で反目
（1900年）

『犬養毅の世界』（書肆心水）より

「同志の一人として共に責を分つべき政友であるものが…却て…之を殺す様な事をする」

「我が党を誤るものは此奴だ！」

中村弥六と犬養毅

- 中村・犬養の対立関係が弥六の評価とどのように関係したのか？
- 鵜崎鷺城など犬養陣営の人々の言説を紹介

鵜崎鷺城が描く中村弥六

- 「悪辣なる策士 中村彌六 」

  ↳『人物評論 朝野の五大閥』,1912（明治45）年

- 三宅雪嶺、黒岩涙香、福本日南などによる序文
- 1914（大正２）年までの2年間に十版を重版

- 中村弥六の政治活動や背信事件を激しく攻撃

鵜崎鷺城が描く中村弥六

- 鵜崎鷺城は新聞記者、評論家

  1873（明治６）年、兵庫県生まれ（本名：熊吉）

  1907（明治40）年、東京日日新聞に入社

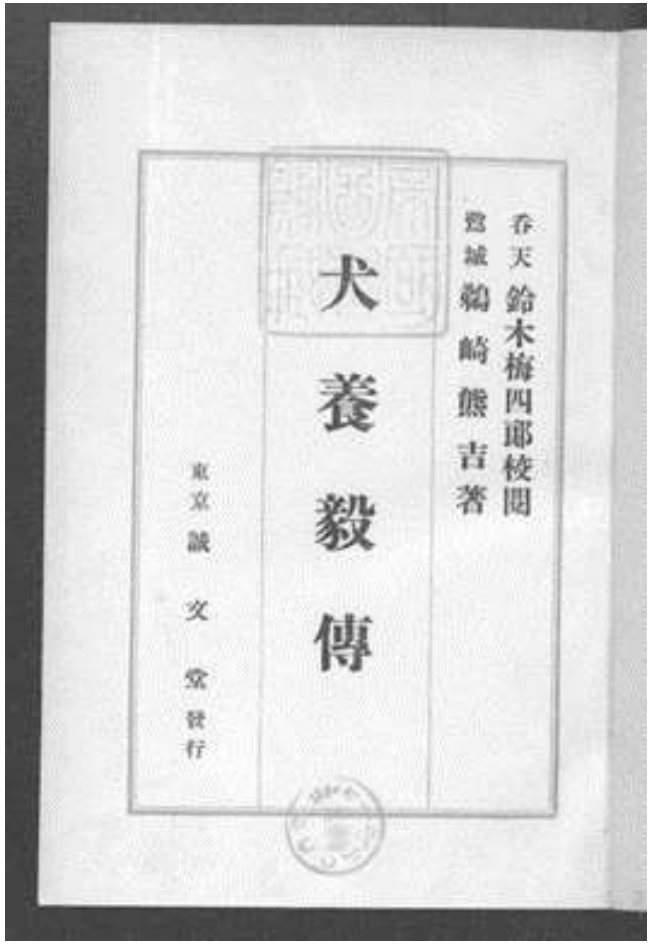
  1912（明治45）年に退職

  評論家として軍閥・財閥批判を展開

  著書に『現代の歴史を作る人々』（1916年）

  『明治大正人傑伝』（1927年）

  『犬養毅伝』(1932年)など



鵜崎鷺城が描く中村弥六

- 鵜崎が『犬養毅伝』を執筆しているの何故か？
  ↳ 犬養毅からの信任が厚い
- 鵜崎鷺城と犬養毅との関係
  ↳ 犬養毅の進歩党時代以来
- 犬養毅が中心となって結成した立憲国民党にも参加
- 犬養毅の号：木堂（ぼくどう）
- ↳ 鵜崎は「木堂宗の信徒」➡ 犬養の取り巻き

犬養毅擁護の文脈で語られる中村弥六

- 伊藤痴遊の言説
  ↳ 講談師（政治講談）としても著名な政治家

- 1932（昭和７）年９月に開催された講演会
  ↳「犬養木堂を語る」
  ↳ 5・15事件で凶弾に倒れた犬養の追悼講演

伊藤痴遊（1867-1938）

犬養毅擁護の文脈で語られる中村弥六 ― 伊藤痴遊の言説

- 「味方と喧嘩ばかりして結局一人ぽつちになった」→ 犬養の世評
- 犬養を擁護しようとして、布引丸事件については……
- 中村弥六は犬養の勧めで革命支援運動に参加したが、
  「金を握ると中村の心が變つた」として、
  弥六が意図的に廃銃・廃弾・廃船を買い込み、
  その危なさを知るが故に　乗船を避けた布引丸が沈没した
- 犬養が弥六を「社会的に葬る」と党から除名したのは弥六が悪いから
  ↳ 伊藤の語りの意図は中村弥六批判ではなく**犬養毅を擁護すること**

犬養毅擁護の文脈で語られる中村弥六 ― 赤堀松畔の言説

- 赤堀松畔は
  犬養毅のシンパともいえるジャーナリスト

- 「布引丸事件と木堂先生」
  （『木堂雑誌』第10巻1月号,1933年）

犬養毅擁護の文脈で語られる中村弥六 ― 赤堀松畔の言説

- 犬養毅が弥六を「社會的に葬むると云い出した」わけではない
  ↳ 犬養は冷たい人間ではないと主張
- 布引丸事件は
「世間の誤解を先生に向けしめるような事件」の「最なるもの」
  ↳ 誤解を解くべく寄稿
- 赤堀の言説も、**犬養毅を擁護**する立場から中村弥六を語ったもの

犬養毅擁護の文脈で語られる中村弥六 ― 古島一雄の言説

古島一雄（1865-1952）

- 『日本及日本人』『九州日報』『萬朝報』の記者
- 1911年に衆議院議員に当選
  犬養毅に従い立憲国民党・革新倶楽部に所属
- 犬養の側近として憲政擁護運動に尽力

犬養毅擁護の文脈で語られる中村弥六 ― 古島一雄の言説

- 『政界五十年・古島一雄回顧録 』(1951年)
- 「布引丸事件の眞相」

〈前段〉布引丸沈没までの経緯(1899年7月まで)

〈後段〉弥六の背信が問題化するまでの経緯(1900年12月まで)

- 古島は弥六による不正を指摘した事件の当事者

↳当事者が脚色された布引丸事件を世間へ伝えた

- 中村弥六に裏切られて「口惜しがる犬養 」、

弥六の不正に対比されるところの「犬養の潔癖 」を強調

- 犬養擁護の文脈で弥六のマイナスイメージが再生産

まとめ

- 鵜崎鷺城の中村弥六に対する攻撃的な論評の背景には
  ↳中村弥六と犬養毅との確執という問題
  ↳中村・犬養の対立関係こそが鵜崎による中村弥六攻撃の理由
- 鵜崎の論評 → 文章中に犬養毅の名前が一切出てこない
- 鵜崎鷺城は中村弥六と犬養毅の関係に言及することを忌避

まとめ

- 鵜崎鷺城 → 『犬養毅伝』でも布引丸事件に触れていない
  ↳事件の国際性、アジア革命の援助者である犬養毅 → 不自然
- 布引丸事件に対する犬養の関与が語られない → 鵜崎の配慮と作為
- 布引丸事件は、
  ↳ 犬養が「冷酷漢」だというマイナスイメージを残し
  事件そのものも外交上の問題化
  ↳ 布引丸事件への関与は犬養の政治生活上の瑕疵なのでは？
- 鵜崎鷺城 → 犬養の名前を伏せたまま中村弥六を攻撃

まとめ

- 伊藤痴遊、赤堀松畔、古島一雄の言説に共通すること
  ↳ 犬養没後における犬養陣営の人々による言説
  ↳ 故人の人生を称賛する、世間の悪評を払拭するという意図
- 犬養毅のマイナスイメージを否定する文脈で中村弥六が語られる
- 中村弥六の党からの除名は、犬養が冷酷なのではなくて、
  厳しい措置が当然なほどに弥六の行いが悪徳非業だという説明
- 犬養毅陣営の側からの説明が、その後の中村弥六評価に影響

まとめ

- 犬養毅のマイナスイメージを払拭するという作業の中で
  中村弥六のネガティブな評価が後世へと残ったのではないか？
- 犬養毅は存命中においても、没後においても人気の高い政治家
- 犬養毅と対立したという関係のあり方が
  中村弥六のマイナスイメージの形成にある程度は作用した
- 犬養との関係性においてネガティブな中村弥六像が作られてきた

ありがとうございました